

柏川修一編

談義本集

二

古典文庫

柏川修

一編

談

藝

集

江苏工业学院图书馆

藏本章

二

古典文庫

平成九年五月二十日印刷発行 非売品

集本義談
二

編者	柏川修一
発行者	吉田幸一
印刷者	白橋印刷所
製本者	共伸舎

発行所

114

東京都北区西ヶ原
三ノ三四ノ一二

古典文庫

電話 〇三(三九一〇)二七・七
振替口座 〇〇一九〇九一四五九七番

目次

凡例……………三

一 錢湯新話 五卷五冊 宝曆四年刊……………七

二 不斷用心記 三卷三冊 明和三年刊……………一五

三 世当返答下手談義 五卷五冊 宝曆四年刊……………二七

解説……………柏川修一……………三五

凡例

一、伊藤单朴の作品は、五種類あつて、うち三種類は既に(一)に翻刻収録した。本集(二)には残り二種(『錢湯新話』『不断用心記』)と、好阿の『当世下手談義』(宝暦二年刊)に対する批判書『返答下手談義』(宝暦四年刊)とを合せ収めた。後者は未翻刻である。

一、翻刻するに当り、およそ次の方針をとつた。

1、本文の翻刻については、できる限り原本に忠実にと心懸、また挿絵は全て収めた。

2、漢字の異体・略体文字・合字・古字の表記は、現行の活字体に従つた。

(前回「凡例」参照)

また、おどり字「ゝ」は「々」に改めた。

3、平仮名の表記の中に、片仮名表記(セ・ツ・ハ・ミ・ヤ・ン)がある場合は、そのままとした。

4、誤字、脱字、仮名遣いの誤り、衍字などは、原文のままとし、できるだけ右傍に（ママ）を附した。

5、原本に存する句点は原本通りとしたが、更に私に読点、を施した。

6、原本の改丁は（ ）を以って示し、その丁の表、裏を、オ・ウとして、丁付とオ・ウとを小字で入れた。また、底本の飛丁はそのままとした。

7、挿絵の箇所は、〔挿絵第○図〕として順序数を付けて示し、図版をその前後の頁に、丁数・表裏を記し、挿入した。

なお、挿絵の中には後人の落書などのあるものもあり、それらは可能な限り修正した。

8、原本の改行のほかに、丁の裏ごとに改行した。

9、会話は、原則として、「『』」を附した。

一、巻末に、収録作品の解題を行なった。解題は、書誌的な説明を主としたるも、備考として、私見を記した。

一、原本の閲覧、利用につき、国立国会図書館、東京国立博物館、都立中央図書

館、成田山仏教図書館、大和文華館、茨城大学などより、多大の御配慮を賜わった。

また常日頃より御指導を戴いている、朝倉治彦先生に心より感謝申し上げます。

一

錢湯新話

絵入

五卷五冊

宝曆四年刊

里俗
教談 錢湯新話序

人毎に、一ツの癖は、有るものを。われにハゆるせ、と佗させたまひ
しハ。吉水和尚なりとかや。実諺のごとく。なくて七癖にて、己
がさまぐ。好む方に、偏ざるハなし。予ハ唯、佗の談話を好て。
晨にハ、隣家の茶話に、食を忘れて。婢婦の機嫌を損。昏
(一オ)には遠く、夜話に遊びて。黒犬に咬れしも、余多度なり。渡
船の乗合咄も。風静なる折こそあれ。浪の起居の、騒がしければ。
一向聞もさだめず。いかゞしてと。思ひわづらふ中に。ふと心づきて。
旅宿のあたり近き。錢湯の亭主に親づき。終日、入来る人の。雑談
を聞に。誠に日々に新にして(一ウ)

又日々にあらたなる。仏神の利生嘶、証拠たゞしく語も有れば。
亦、其時所も、朧月夜に。己が影に驚て。氣を失し、臆病談。
悵氣の角ぐむ。あしき女の、身の上物語。毎日一つ事聞ぬ、たのしさを。
我に等き人しあらば。下配せん、と書留しも。今ハ昔、宇治拾遺の。
高貴き跡に（二オ）ならへる、潜諭の罪の逃処なく。赤裸にせられても。
露うらむべきかたなき。湯屋盗の。あつかましくも。人の誹笑をかえり見ず。
則こゝに、序文の真似を

武州多摩郡青柳の老農

伊藤单朴書

宝曆四歳戌春（二ウ）

前編 錢湯新話惣目錄

一之卷

宇賀神の利生話
うがじん りしやうはなし

船の足を見て福を得たる話
ふね あし ふく であ はなし

痴人が阿房を笑し話
あほう あほう わらひ はなし

二之卷

摂津国有馬妬湯の話
せつつのくにありまうはなりゆ はなし

武蔵国谷保天神由来話
むさしのくにやぼてんじん ゆらい はなし

能登国下馬地藏の話
のとのくにげばちぞう はなし

三之卷

野狐売僧を欺し話（三才）
のきつねまいす あざむき

古猫娼夫を欺く話
ふるねこ たわけ あざむ はなし

麻疹軒、人相を見違たる話

四之卷

姥が火の妖怪話

俄道心者、俗山伏と内所話

信義に背たる者、天狗に抓し話

五之卷

扇の辻子百物語の話

猪の孝行話

男升女升の話

錢湯新話惣目録終（三ウ）

錢湯新話卷一

宇賀神の利生話

誰も皆、戸ざし忘れて住御代の。千世の始の、春の長閑さ。四方の海
波静に。佐保姫の霞の衣も。鶯の声のあやより、織出すらん、
と思はれ。めつたに、心ゆるくとして。百になりても、嬉しかるべ
きハ、正月ぞかし。昨日ハ鬼か人か、と疑ハれし。借金こいも、一
夜明れば、笑顔作りて。「去年より格別、若やがしやつた」と。慶安
いへば。「まんざらの虚ながら。さりとハ腹の、たゝれぬもの。およ
そ見るもの、聞物に。何一ツ、おもしろからぬ物もなく。貴人は、花
鳥の、色音に愛。中から下ハ、己がさまぐ、心の好所に従ひ。初

芝居の気色が（二オ）常より格別、といふもあれば。子供ハ絵草紙の新板に。手の舞、足の踏所を知らず。梅の花より、紅絵を悦び。鶯より万載の聲がよいとハ尤千万。非常の松竹も、中よく立ならんで。たのしそふに見へ。掛鯛さへ向合て、鰯の見ゆる迄、笑ふて居れば。生としいける物毎に。何れか春を、楽まぬ物やある。我も去年の秋。旅宿に、寓居てより以来。話聞為に、毎日銭湯に至り。入来人の物語に、心を慰、おもはずも。年とる大豆を、旅亭に拾ひぬ。けふハ殊更、春の始のひとひ、二日なれば、夙に起出て、例の浴室に至りて見れば、此所にも春立けふの門、押開て。若湯の匂ひ。去年の垢臭かりしに引替て。蘭麝鼻のもげるやうなり。湯屋の亭主ハ。賓頭盧尊（一ウ）